

タペストリー

松井 とし



子どもたちと「おりもの（織物）」とよんで楽しんだ手仕事がある。

フレミッシュ織りの基本を習った時、子どもたちも楽しめそうだと思い付き、やさしくアレンジしたのだが、毎年子どもたちが熱中した。油絵のキャンパス用の小さな木枠の上下に頭の丸い真鍮釘を打ち込み、よりの強い細めの毛糸を縦糸に張り、よりのあまい太めの毛糸を横糸にしてジャンボ綴じ針で、一目おきにすくっていく。織物とは言っても簡単なものだが、縦糸と横糸の組み合わせ方によって、一人ひとりの個性が織り出され、なかでもきれいな色が続なる変わり糸を横糸にした時に生み出される色合いは美しかった。

織物ブームが広まり、次第に家庭からもいろいろな毛糸が集まってきた。A男はその中に色変わりの細い毛糸を目ざとく見つけ、縦糸に使うと言ってきた。その時の私の反応は

内心疑問符のついたものだった。ところが出来上がってみると、予想もしなかった美しいチェック柄が表れた。

一目すくいを規則的に続けていくと、美しい平凡な畳編み。それが不規則になった時おもしろいデザインになる。甲にえくぼの残る子どもの小さな手の運びが、自分の意志とは関係なく不規則なるものを生み出すのだが、B男は満足して「これでいい」と外へ出かけて小枝を拾ってきて差し、素晴らしい壁掛けを作った。この時も私は、常識にとらわれ固くなった自分の感じ方を恥じていた。頭では分かっているつもりでも、私の心の隅に規則的なものは規則的にできる方がより望ましい、などという価値観があったのだと思う。

クリスマスを楽しみに待つ頃の壁に、出来上がった色とりどりの織物をピンで止めツリーを飾った。さらに作品が増えた時、麻糸でつなぎ合わせて壁いっぱい大きなタペストリーを作った。まさに十人十色、一人ひとりが心をかたむけ、時間をかけて織り出した充実。その充実をつなぎ合わせると、思いもかけなかった新たなものが生み出され、みんなどで見入った。はからずも個と集団の関係を象徴的に表してくれたタペストリーだった。

ささやかな織物作りを通して、黙々と手を動かしていた子どもたちの姿から気付かされ、教えられたことは、今なお深く心に刻まれている。

(元幼稚園教諭)